

パプリカの尻腐れへの技術的対応

パプリカ尻腐れ果は、根から果実へのカルシウム供給不足が原因とされている生理障害であり、発生パターンに季節的な変動がみられます。発生により可販果率の低下を招くことから、生産現場で問題となっています（図）。果実へのカルシウム供給を阻害する要因としては、灌水不足、強日射および著しい高温条件が考えられますが、栽培管理によって尻腐れ果の発生を低減するための技術動向について、国内外の文献より整理したので概要を紹介します。



図 パプリカにおける尻腐れ症

☆ 技術の概要

1. 灌水不足・強日射・高温条件の緩和

1-1. 果実が最も成長する生育初中期（開花後 3~4 週間まで）に少量灌水を多数回行うことが、尻腐れ果の発生抑制に効果的であると報告されています（Silber ら, 2005; Hochmuth ら, 2009）。

1-2. 温室栽培では、遮熱剤の温室被覆材への塗布、遮光・保温カーテンの展張、および遮熱フィルムの温室被覆材としての使用により、強日射・高温条件が緩和されるため、尻腐れ果の効果的な発生抑制が可能であると報告されています（藤田ら, 2020）。

2. 肥料バランスの調整

施肥・液肥中の窒素濃度およびカリウム濃度の減少、そしてカルシウム濃度の増加により、尻腐れ果の発生抑制が可能であると報告されています（Russo, 2012; Vosland and Votava, 2012）。また、塩化カルシウムの葉面散布も発生抑制に効果があるとされています（三村, 2004）。

☆ 活用面での留意点

・遮熱剤の塗布、および遮光・保温カーテンの展張は、温室内の日照条件を悪化させ、収量減を誘発する可能性があるため、注意が必要です。

・ピーマン尻腐れ果もパプリカと同様に、果実へのカルシウム供給阻害が主な発生要因であることから、上記の技術を適用することによる、尻腐れ果の発生抑制が期待できます。

・パプリカは着果負担が大きく、生理障害以外にも着果数そのものが変動します。筆者らは同化物の分配バランスに着目して、パプリカの着果の変動を予測するモデルを開発しました（Homma ら, 2022）。今後も技術開発を継続し、パプリカの安定生産に貢献したいと考えています。